

## 鈴木大拙「若き思い出」に附す

鈴木 昭明

## その1 大拙の歩み方

大拙に於ける日本近代を考える時、私は作家の埴谷雄高の述べた歴史観が浮かんでくる。それは、いわゆる弁証法的でもなく、また実存的でも、キリスト教的でもなく、さらに初期インド仏教や中国仏教からくる史観でもない。「例えば螺旋階段の様な」歴史観である。横から見れば或る方向に廻りながら進みながら、上から見ると単なる円ではない螺旋、それが大拙の一生であった様にも、また思考方法であったように思えてならない。マルクスの影響が多分にあつた埴谷にとつては共產主義社会に駆登る方向であつたかも知れず、一方、大拙の方向は一体何であつたかは今日に於いても大きな問題になるが、ここで大切なのは大拙の円環であり、そして大拙のまず最初の円そのものである。

## その2 『Early Memories』の意味

私はその最初の円を ①明治最初期、大拙若年の時の父の死から始まる金沢での貧困の中ではぐくまれた感性 ②鎌倉円覚寺での禪修業 ③アメリカを中心とした西洋での十数年の生活 の三段階で理解できると考える。換言すれ

ば、禅体験を主体的に把握し、異文化の中で生きた大拙の青春の時がすべての基・円であり、その後はそれを円環としてひたすら昇った連続として、私は大拙の生涯を捉えている。

私が『Early Memories』の拙訳を試みたもの、この理由からでもある。自らを語ることが嫌いであった大拙の自叙傳としては、全集第三十二巻の『也風流庵自傳』『私の履歴書』の他、数篇あるが、それらと『Early Memories』を比較すると、後者は率直にいつて重複する部分も多く未完のものに近いと思う。しかしこの本は、鎌倉での最後の接心そしてアメリカでの最終的な悟りを語り、しかも「最初の体験、正にそれこそが、最も大切なものなのです。」で自傳を終えたそこにこの本の意味があると私は考えている。そこで、この場所から、大拙はこの自傳を青春の完結として良い意味で、投げ上げたと思う。

### その3 大拙文書の翻訳の注意点

大拙の英文著作を翻訳する際に注意しなければならぬ点が二つある。一つは、大拙の日本文体で訳すことが可能か？更にいえば、自傳を大拙の肉声で訳せるか？という点である。翻訳とは単に他の言語に置き変えることではないのは自明であるが、大拙の日本人性と世界人性の交叉の複雑さは大拙英文著作を訳す時にも現われることを先ず確認して置きたい。私の訳は己れの語学力の拙さから大拙の肉声を描くことが出来なかったが、大拙を直接知る方々の助力を得て英文著作を翻訳する大切な時期に今日きているのでは？と考えている。

残りの一つは、彼の英文著作は大拙が直接書いた作品であるか、または大拙の口述をもとにして他者が英訳したか、という点である。勿論、最終的に大拙が校閲しているのだが、作品に於ける文体は微妙に違ってくるのは当然である。その意味でこの本が出版に及ぶ状況とその後の流れを概括しておく。

## その4 発刊後の推移と著述背景

私の知るところでは、この著作は四回に渉り、三社によって発刊されている。小論のために独自では掲載されなかったが、大拙の個人を知る上での入門書として適していたのではないかと思う。

この邦訳は A Zen Life : D.J.Suzuki Demembered. New York And Tokyo : John Weatherhill, Inc., 1986 の中の冒頭に載せられた『Early Memories』から訳出したもので、粗訳後に幸福にもこの自叙伝に直接たずさわられた別宮美穂子(旧姓・岡村)さんにお会い出来て、この本が出版された前後のことがわかった。そして美穂子さんにまず最初に指摘されたのは、私が訳した Weatherhill 社版以前にこの書は

The Training of the Zen Buddhist Monk. New York : University Books 社版に掲載され、この書に関する脚注の冒頭部分を読ませていただいた。出版の動機にふれる大切な部分なので、まず訳す。

一九六四年、九十四才の鈴木博士は、岡村美穂子嬢とカーメン・ブラックカー博士(Dr. Carmen Blacker)が博士にくり返しインタビューして取材した覚書から、この論文をまとめる事を許可されました。最初にこの論は、『中道』The Middle Way の一九六四年十一月号に掲載され、そして、ロンドンへの The Buddhist Society 社のクリスマス・ハンブリーズ社長の寛大なる許しを得て、ここに再版する。

この論文は、鈴木博士の多くの著作のなかでも独自なものである。というのは、博士が若かった頃を話して欲しいという願いを、事実上、謙虚さがゆえに常に断られてきた。今やこの論文によって、博士が私達に伝える修業者(monk)としての博士自身の体験が、この本(The Training of the Zen Buddhist Monk)を理解するうえで、新しい鍵を与えてくれる。また同時に、博士は常に自分自身の体験を精神の礎いしなとして、著作に励んでいることが示されている。

この本が世に出る三十年以上も前より、鈴木博士は仏教学の分野に於いて英文著作を二十冊以上も出版されてきた。今ここで、博士自らの精神をつくした体験から生れ出た博士の学問を、私達は基礎づけることが可能となるのだ。――出版者

この脚注によって、まず最初に Early Memories の発刊の推移がわかる。即ち The Buddhist Society 社の仏教雑誌『中道』に初めて掲載され、その脚注では不明だが、同社四十周年記念としての手により The Field of Zen に一九六九年に載り University Books 社から Weatherhill 社へと時と共に発表されてきたのである。その理由は小論の自伝として好適であったのだが、この脚注にあるように大拙の「禪体験」を知る好著である事が、最大の理由と私は思う。もう一つ判明するのが、この著述がれなされた経過背景である。この点に関しては、次に美穂子さんの話を要約する

- (一) このエッセイは、大拙生前に発表された。
- (二) ブラッカーさんと彼女が、大拙に質問しながら、大拙が語った事をまとめた。
- (三) ブラッカーさんが主体となって、この本をまとめた。
- (四) そのまとめた原稿を、二人で校正して、大拙の許しを得て発刊した。
- (五) ブラッカーさんは彼女より一回り年上の女性の英国人で、日本思想研究者である。ハーバード、ケンブリッジなど多くの大学で学び、慶応大学では「論吉論」も為し、最終的には「山伏論」を書きあげて、ご健在で、今でも日本に再々こられている。

あえて簡条書にさせてもらったが、「この本の業績はブラッカーさんにある。」と満面に笑まれる美穂子さんに、その人柄のすべてが出ていた。

## 若き思い出

≪Early Memories≫

鈴木大拙  
鈴木昭明(訳)

私の家は金沢(原注1)の町で代々続いた医者でした。父も祖父も、そのまた曾祖父も皆、医者であったのですが、不思議な事にみんな若くして亡くなりました。勿論、その頃のことですから、若死する事はそれほど珍しいことではないのですが、昔の封建社会下での医者の場合、藩主からいただく俸給が切り詰められることは、さらに不運なことだったのです。私の家は武士階級であったのですが、父の代で貧しくなっておりましたし、私が六才の時に父が亡くなった後、私ども家族は、封建社会終焉後の武士階級の没落からくる多大な経済困難によって更に貧しくなっていました。

その当時は、父親を亡くすことは、多分、今日と比べて、もっと大きな痛手でした。と言いますのは、その頃は一家の長たる父親に、子供の教育や、将来の生活の道を見いだすような、人生の大切な岐路を選ぶ事を多く委ねていたからです。私が早く父を亡くした事と、更に十七、八才の頃に続いた不幸の数々が、私の宿命を考えさせきつかけとなったのです。「どうして私はこんなに早く人生の出発点で、これほど多くの不利な立場から歩み始めねばならぬのか?」と思ったものです。

そこで私の思いは、哲学や宗教に向かつていきました。そして家は臨済宗でしたので、私にふりかかる問題の答を求めて、禪に向うのは自然のなりゆきだったといえます。私も家族が帰依していた或る臨済宗の寺（そこは金沢でも一番小さな臨済の寺でしたが）に行つて、そこのお坊さんに禪について尋ねた思い出があります。しかし、当時の日本中の寺の禅僧の多くがそうであつたように、その寺のお坊さんも余り禪を知っていませんでした。実際、『碧巖録』（原注2）すら全く読んでいない状態で、私の相見は長続きはしませんでした。

私はよく同年輩の学生達と哲学や宗教について議論したのですが、思い出してみますと、その頃いつも私を悩ましていたのは、「いったい何が雨をもたらすのか？ 何故、雨は降る必然性があるのか？」ということでした。今振り返つてみますと、私にはキリスト教の教えである「正しき者にも、正しからざる者にも、共に降る雨」に似かよつた何かが、私の心のうちにあつた事が解ります。その当時偶然ですが、キリスト教の宣教師と数回出会うことがありました。十五才の頃、金沢にオーソドックス・チャーチ（原注3）から来られた一人の宣教師がおられました。記憶では、その方は私に和綴の旧約聖書・創世記の和訳複写本をくれ、「家に帰つて読んでみなさい」といわれました。そこで読んでみましたが、全く理解できそうもありませんでした。何故なら、まず最初から神が存在していたからです。「その上でしかし、どうして神は、この世界を創造し得るのか？」、これが私を途方に暮れさせたのでした。

同じ年に、一人の友人がプロテスタントに改宗しました。彼は私がキリスト教徒になることを願つて、頻りに洗礼を受けさせようとしてました。しかし「キリスト教の真理を確信するまでは、洗礼をうけない」と私は彼に言いました。私には、「何故、神は、この世を創造したか？」という問題が謎として、なお在つたからです。そこで他の宣教師（この時はプロテスタントの人でしたが）の所に行つて、同じ質問をしました。その人は「万物が存在するためには、この世は創世主が必要なのだ」と言うのです。そこで「誰が神を創つたのだ？」と尋ねると、「神が自らを創つた」と彼は答えました。私にとって「彼は創世主ではない！」のです。私にはとうてい納得できる答ではありませんでしたし、

この事が常に繰返される疑問となり、私がキリスト教徒になる障害物としてあるのです。

そういえば、このことでもう「つ思い出したことがあります。この宣教師はいつも大きな鍵たばの束を持ち歩いていて、それが私にはおかしく映ったものでした。その当時、日本では何でもかんでも鍵をかけるなんて事はしなかったもので、この人がそんなに沢山の鍵を持っているのを見るにつけ、「どうして、それ程多く鍵をかける必要があるんだろう？」と不思議でした。

その頃、新任の先生（訳注1）が、私の学校にやって来られました。数学を担当され、その教え方が上手なものでしたので、先生の指導で私でも数学に興味がわいたのです。そればかりでなくて、先生は禅にとっても関心があり、その当時のすばらしい師家だった洪川老師（原注4）の下で参禅した人でした。先生は生徒に禅に興味をもたせようと努力され、白隠禅師の『遠羅天釜』（原注5）の複写を印刷して、生徒に配りました。私には、その本がほとんど理解できなかったのですが、なにかとても興味が湧いて、もっと知りたくなったので、越中の高岡の近くの国泰寺に居られた雪門老師（訳者注2）を訪れようと決意したのです。その寺が高岡の近くのどこかにあるらしい位は知っていたが、ほとんど、どうやって寺にいけるのか分からない状態で家を出発しました。五、六人位でいっばいになる古い乗合馬車にのって、山々の間をぬうようにして俱利伽羅峠くろがらを越えて行った、その旅を今でも覚えています。道も馬車もひどいもので、頭をなん度も天井にぶつけたものでした。高岡から残りの寺への道は、多分、歩かなくてはいけなかったと思います。

私は紹介状なしで行ったのですが、その寺の僧達は心よく迎えてくれました。そして私に「老師（原注6）は留守だが、もし良かったら寺に入って室内で坐禅しても結構です。」ともいってくれました。僧達は、坐り方や、息の吸い方を教え、狭い部屋で坐禅を続けるように告げて、私を一人にして出ていってしまいました。一、二日の後、老師が戻られ、相見していただきました。勿論、その頃は全く禅のことをわかっていませんでしたし、『参禅』の正しい決ま

りも知りません。ただ「老師の所にいきなさい」と言われたので「遠羅天釜」の複写をにぎりしめて出掛けました。

「遠羅天釜」の大部分は、かなりやさしい言葉で書かれているのですが、文中には私には理解できない難しい禅語がかなりありましたので、老師にそれらの言葉の意味を尋ねたのです。すると老師は怒って、私の方に向き直って、こう言いました。「お前は どうして そんな愚かな質問をするのか？」と。私は何んの教えもいただかず元の部屋に戻され、ただひたすら坐禅を続けるように言われました。全く独りで置きざりにされたのです。誰も私に説明してくれません。食事を運んでくれた僧達さえ、私に決して話しかけないのです。この時が、家から遠く離れた最初でしたので、間もなくとても淋しくなり、家が恋しく、母のことが思われて仕方ありませんでした。四、五日たち、寺にお暇し、母のもとに帰ったのです。老師との暇ごいについては何も憶えていませんが、家に再び帰りついた喜びだけは、はっきり記憶しています。まさに、最も愚かな下山でした。

その後、私は日本海につき出た半島、能登半島にある蛸島たこという小さな村で英語を教えはじめました。そのの、ある浄土真宗の寺に一人の学僧がおられまして、私に『百法問答』（百の法に関する質問と解答）という唯識派の教科本を見せてくれました。でもその本は、かけ離れてとても難解で奥深く、もつと学びたいと思ったのですが、私には全くわからなかったのです。

それから、金沢の私の家からおよそ五里（十五マイル）離れた美川みかわという町で、また英語を教えるようになりました。またもや母がとても恋しくて、いつも週末には母に会うため、歩いて帰ったものでした。それは約五時間もかかる道中でしたから、学校が始まるのにちょうど間に合うためには、月曜日の朝の午前一時には、私の家を出発しなくてはなりません。それでも母と出来るだけ一緒に会っていたかったので、残り一分まで家に留ろうといつも思ったものでした。

ところで、ちょっと付け加えますが、その当時私が教えた英語は、とてもおかしなものだったので。その奇妙さ



のために、後に私がアメリカに最初に行った際、私の話す英語を誰もわかつてくれませんでした。常に全ての事を、ただひたすら文字通りに訳してしまつたからです。そして私がとても困惑したのは、英語で「犬は、持つ (has)」、四つの脚を」(a dog has four legs) とか、「猫は持つ (has)」、一つの尾を」(a cat has a tail) という表現に対してだつたと思います。日本語では「持つ」(have) という動詞は、このように使いません。もし「私は二つの手を持っている」と表現したら、まるであなたの手以外に、別の余分の二つの手を持っているように聞こえるでしょう。その後ある時、西洋思想では所有の考え方については、能力、二元論、そして対立関係を強調するためだ、これは東洋思想にはないと、私も判るようになりました。

私が美川にいた六ヶ月間は、禅の勉強は中断してしまいました。でも弁護士だった兄(訳注3)を頼つて神戸に行き、そして間もなく兄が、東京で勉強する私のために月々六円の生活費を送つてくれることになりました。その頃は、学生の下宿代は一ヶ月およそ三円五十銭ぐらいだったのです。私が学ぼうと選んだ大学は早稲田大学でした。しかし、東京に着いてまず最初に私がした事は、その当時、円覚寺の管長でいらした洪川老師のもとで禅を学ぶために鎌倉に出掛けたことでした。今でも憶えているのですが、東京を夕方に立つて、次の日の朝早く鎌倉に辿りつく間、ただただ歩き続けた事です。(原注7)

知客(禅院の賓客接待の役位の僧)が、紙に十銭の「香料」を包み、老師のもとに初見のために私をともない、盆の上にその包みをのせて差ししました。その知客はとても印象的な人でした(訳注4)。彼は正しくそれまで見てきた達磨(原注8)の画そのものでしたし、全く禅の風貌を持っていました。老師は、私が初めてお目にかかった時、七十六才になられていました。お身体も、お人柄も、とても大きな方でしたが、つい最近の発作で歩くことがご不自由でした。「どこからやって来たのか?」と尋ねられましたので、「金沢の生まれです。」と答えますと、喜ばれて「禅の修業を続けるように」と励ましてくださったのです。多分これは、金沢あたりの北陸地方の人間は、特に忍耐づよ

く、しつかり者と思われていたためでしょう。

独参どくさんで二度目にお会いした際、老師は公案（原注9）として「せきしゅ隻手」（訳注5）を私にくださいました。私にはその当時、公案を受け入れる用意は、全くありませんでした。事実、禪に関して私の心は、白紙のようなものでした。その紙の上に、どの様なものでも書き込めるのです。参禅に行くといつでも、老師は何も語らず左手を私に差し出すのですが、それがとても私を当惑させました。一所懸命に理にかなった「おんじゆ隻手の音声」の公案を答えようとはしますが、いつも当然ながら洪川老師に拒こぼまれ、数回の参禅のあとで遂に私は袋小路に入ってしまったのでした。

ある日の老師との相見が、とても印象に残っています。老師は池を見渡せる縁側で朝食をとり、机を出して、粗末な椅子にすわって、お粥を陶器の鍋からご自分の椀にすくっておられました。私が三擲ぱいをいたしますと、真向いの椅子にすわるようにいわれました。私はその時おっしゃられた事を今は何も憶えていませんが、しかし老師がなされた全ての動作、私に椅子にすわらせようとした仕草や、自ら鍋から粥をすくわれる様、がとても強く私の胸をうったのです。そうです正に禅僧ならではの振舞おもひだと思えました。老師そのものが、直截さく、端的、誠実、そして勿論、何ものとも定める事の出来ない這箇しやこ、それなのでした。

私が老師の提唱に臨んだ最初の機会も、また忘れることが出来ないものでした。それは僧侶達が「般若心経」や、夢窓国師の遺言状の「絶法」（原注10）、「我に三等の弟子あり云々」で唱え始める厳肅な儀式でした。その間、老師は佛像の前で三拝し、それから仏壇に面した椅子から立ちあがって、まるで大衆というよりも寧ろ佛陀せつだに語りかけるようでした。侍者が経机きょうきをささげ持って来て、経が続く間も、老師はすぐに提唱を始めた様子でした。

その提唱は「碧巖録」の四十二則、龐居士ほうこ居士が菓山くわさんを訪れた話で、内容は、相見の後で菓山は十人の弟子達に山からおりて寺の門まで龐居士を見送らせました。その途中で次の様な問答がなされるのです。「居士曰く、好雪、片片別処に落ちず」全禅客曰く、「甚処にか落在す」云々。（訳注6）

この話は、私に禅僧達が問答する風変わりな題目として引きつけられました。一方、老師はなんの説明も加えず段落を読み、まるでその語録の言葉にうっとり没入している様に読みつづけるのでした。その言葉は解りませんが、この読み方にとっても印象づけられ、私は今でも、椅子にすわり前に置かれた教本から、好雪片片と読まれる姿を思い出します。全てこれらの事が起つたのは一八九一年、その時、老師は七十六才、そして私は二十一才でした。さらに、その年の冬至の接心に参加したことも憶えています。この日は僧侶達がお米を搗いて餅をつくって、一晩中みんなで大宴会を続けるものでした。まず最初に搗かれた餅は佛に捧げられ、そして二番目の餅は老師に召上ってもらうのです。洪川老師は大根おろし（原注11）に餅をつけて食べるのが大好物で、とても沢山の餅を食べられたものでした。この日も、もう一皿お代りされようとしたところ、侍者が「そんなに沢山お食べになると、お身体に悪いですよ。」といつて断りました。すると老師は「消化薬を飲んだら絶対大丈夫」と、お答を返されたのです。

翌年、一八九二年の一月十六日、老師は突然亡くなりました。そして丁度その時、私は老師の死に際に立会うこととなったのです。私と従者達は、控えの間で戸の近くに置りました。その時突然、老師の部屋で何か大きな物が落ちる音を聞きました。侍者が部屋に急いで入りますと、老師が床の上に意識がない状態で倒れておられたのです。おそらく老師は東司（洗面所）を出られようとした時に発作を起こし、倒れて頭を引出しの角に打ったようでした。あの大柄な身体が床に倒られたので、とても大きな音がしたのです。すぐに医者が呼ばれ、やって来た医者は脈を取りましたが、「もう手遅れです。」と言っただけでした。老師はすでに、事切れていたのです。

円覚寺の管長として洪川老師の後継者となったのは、釋宗演老師（原注12）でした。洪川老師が亡くなった当時は、宗演老師が上座部（小乗）仏教を学ぶためにセイロンを訪れてから、丁度、日本に帰られた頃で、すでに実力者として認められておられました。宗演老師はとてもすばらしい知性の持ち主であるばかりでなく、老師の資格とも言うべき印可もすでに得けておられましたし、しかもとても若くて、その当時、約十五年程の修行でその様な高い地位につ

くことは普通ではなかったのです。印可を受けた後、西洋の学問を学ぶために慶応義塾大学に入りましたし、その事も同じく禅僧として稀なことでした。多くの人がその歩み方に批判的で、洪川老師でさえ「西洋を学ぶことは全く役立たないことだ」と、宗演老師にいったほどでした。しかし宗演老師は他人の警告などに気にもとめず、己れの道をひたすら歩まれました。とにかく全く慣習にとらわれない才智を持った、すばらしい人物でした。

洪川老師の葬儀の際は宗演老師は喪主として全ての葬儀万端を執り行い、そしてその年、一八九二年の春、円覚寺の師家に任ぜられ、私は宗演老師に参禅するようになりました。

宗演老師は、私の公案を「無字」（訳注7）にかえました。というのは私が「隻手の音声」をうまくこなすことが出来なかったので、「無字」の公案で私の見性をもっと早く明らかにさせようと思われたからです。宗演老師はこの公案に対して何も手助けしてくれませんでした。そして私は数回にわたる参禅の後、何も答えるものがなくなりました。

その後の私の四年にわたる苦悶は、精神的、道徳的、そして知的な迷いとして続いたのです。私はその究極は、ただ素朴、端的に「無字」を分らねばならないと感じていました。しかし「どうやって、この端的なものを掴んだらいいのか」が分からず、それは「本の中にあるに違いない」と思って、私が手に入れられる限りの禅の本をみんな読んでみました。その頃私が住んでいた佛日庵には、北条時宗（原注13）に献じるために出来た神殿があり、その中の一室に、寺に伝わる沢山の本や資料が一杯置いてありました。夏のあいだ見つけることの出来た全ての本を読みつづけ、私の時間を殆ど費してしまいました。漢文の私の知識は未だもの足りないものでしたので、教本の多くは理解できませんでしたが、「無字」に関して知的に可能なあらゆる事を見い出そうと、全力を挙げました。

私が特に興味を持った本の一つが『禅關策進』（禅の関所を乗り越えるために鞭打つ）で、雲棲株宏（一五三五—一六一五）という明朝の中国僧によって編まれた本でした。

それは禅の修行について書かれ、またいかに公案と取り組むかについて、多くの師家達によってなされた著語を集め

たものです。この本の中に見いだし、「これに従っていこう」と思った一例を挙げると、次のような箇所です。

信が十分あれば、疑も十分あり、疑が十分あれば、悟りも十分ある。禪に入る前に蓄積された、多くの知識、経験、すばらしき語句や、自尊心など、それらの全てを投げ捨てなければならぬ。全精神力を公案を解くために注ぎこんで、昼夜をかえりみることなく坐し、心を公案に集中せよ。なん度もそうする内に、いつか時空はなくなり、死人のような己れを見いだすだろう。そして心の中に何かが立ち上る、或る境地に達した時、それは觸骸が粉々になるようなものだ。お前が得たその体験は、外からやって来るものでなく、己れ自身の内より生れるのだ。

そこで精神集中の方法として、舍利殿（原注14）、そこには佛陀の歯が納められているのですが、その裏の洞窟で多くの夜を費したものです。しかし私の意志の力の弱さの為に、いつも坐り続けることが出来ず、何か口実をもうけて去ろうとしたものです。例えば「蚊がいつばいい」とか、いった様なことで…。

私はその四年間は、ケール博士の（訳注8）『佛陀の福音』を日本語に翻訳することを含めて、多くの種類の著作で多忙でしたが、しかしいつでもこの公案が私の心の奥深い所でわだかまっています。それこそ、疑いもなく私が最も心を奪われることでした。そして藁塚わらづかによりかかって野に坐りつづけ、「もう『無字』を悟ることが出来なかつたら、私にとって人生は何んの意味もないものとなってしまおう」と、考えていたことを憶えています。後年、西田幾多郎（原注15）が、私が「その頃しばしば自殺について話していた」と彼の日記のどこかに書いてしまいましたが、私としてはそんな事を言ったことは憶えていません。『無字』について答えるべき、それ以上の何ものもないと分った後は、相参、接心（原注16）の間の義務的な参禅以外、釈宗演老師に参禅するのをやめてしまいました。そしてその結果は、常に老師が私を如意で打つただけでした。

この種の危機は、人間の生涯において公案をとくために、全力を注ぐ必要性としてしばしば起こることです。これについては『荊棘叢談』けいげきそうだん（イバラとアザミの物語）、という本の中に物語りとして上手に説明されています。この本は

白隠禪師の弟子（妙喜宗績）によつて編まれたもので、禪修行中におけるチクチク刺さを射すような体験が語られているのです。

沖繩から或る一人の僧が禪を学ぶために、白隠の高弟で、荒々しくまた信念の人であつた遂翁すいおう元慮もとの下にやつて来ました。この遂翁こそ、白隠がいかに生き生きと教えを表現したかを伝える人物でした。その僧は遂翁の下で三年とどまり「隻手の音声」の公案を工夫し続けたのです。いつの間にか、早やその僧が沖繩に帰る時が近づいてきました。が、まだ公案は解けません。とても絶望して、涙ながらに遂翁の所にやつて来ました。師家は僧を慰め、こう告げました。「心配するな。出発を一週間延ばして、全力で坐り続けなさい」と。七日間は過ぎましたが、公案はまだ解けません。再びその僧は遂翁の下にやつて来たので、僧になお一週間出発を延期するように勧めました。その一週が終り、僧がまだ公案を解けずにいた時、師家は次のように言つたのです。「三週間の後に、悟りに達した人達の譬えが昔から沢山ある。だから、三週間目をやつてみなさい」と。しかし三週が過ぎても、どうしても解けません。そこで師家は「さあ、あと五日間やつてみなさい」と言いました。だが五日は過ぎても、僧はほとんど全く公案を解くことが出来ないで、遂翁はついに告げたのです。「もう三日やつてみなさい。そしてもし三日後、貴公きこうがまだこの公案を解けなかつたら、そこで貴公は死を覚悟しなさい」と。

そしてやつと始めて、その僧は彼に残された全生涯を賭して、その公案を解こうと務めたのです。三日後、それは成なされました。

この話の教訓は、人は全力を挙げてその結果に向つて、全てのものを抛つ決心をしなければならぬということです。「人間の窮地の極きはみは、禪の好機」人が絶望の極みに達し、死を賭したその時に、悟りに達することがしばしば起きるものです。私は、多くの人々にとつて悟りは「正に最早もはやこれまで」と言うところに立つた時にやつて来る、と思うのです。悟りに達したその人達は、その間、死の途上にあつたのです。

普通は人には多くの選択肢があり、逆にいへばそれで自分自身に言い訳けをすることが可能です。公案を解くと、極限に立たされ続けなければならないことで、直面している事を「選ぶ」という可能性などないのです。為すべき事は、唯だ一つなのです。

私にとってこの危機もしくは極致は、私がアメリカにケール博士の『老子道德経』の翻訳を手助けに行くことを、最終的に決める段階でやってきました。その冬（原注17）の臘八接心（原注18）こそが、私に残された接心に参じる最後の機会となり、ここで若し私の公案がとけなければ、最早決して悟れないだろうと実感しました。その接心に、私の精神力の全てを傾けなければならなかったのです。

その時まで依然として、私の心の中に「無字」が常に気にかかっていました。然し「無字」を意識すればするほど、かえって、「無字」から離れていく事になり、そしてそれこそ、本当の定・三昧（samadhi）でないのです。然し接心が終ろうとする五日目ごろ、私から「無字」を意識することは、消えていきました。私は「無字」と一体となり、「無字」に帰したのです。そこは最早「無字」を意識することに伴う分別の意識がなくなった所でした。これは、まことの定の境地です。

しかし、この定のみではまだ充分ではありません。その境地より抜け出て、それから覚醒し自覚化しなければなりません。その目覚めこそ般若（prana）なのです。定から抜け出て、般若それそのものを見性する瞬間こそ、それが悟りなのです。その接心の間、定の境地を脱した時、私は言葉に出しました。「わかった！これ、これだ！」と。

私はどのくらい長く定の境地であったか憶えていませんが、鐘の音によってその境地より我にかえりました。私は老師のもとに参禅に出掛け、そして老師は私に拶所のいくつかで「無字」について試みの問いをされました。私はただ一つの事を残して他の全てに答えたのですが、その残りの一つに私が躊躇すると、即座に老師は私を退室させました。でも翌朝早く私は再び参禅し、今度は残された問いに答えることが出来たのです。今でも僧堂から帰源院の私の

宿所に歩いて帰った、その夜のことを憶えています。月明りに佇む木々を眺めながら、月光も木々も透き通り、私もまた透明でした。

私は、体験するとは一体どの様なものであるかを自覚する、その重要性を強調したいのです。見性（原注19）の後、なお完全には、私は私の体験を自覚していませんでした。私はまだ夢のような中にあつたのです。悟りの成就した最高の境地は、後に私がアメリカにいた間に訪れたのです。すなわち突然、禪語「ひんそと 脇外に曲らず」（訳注9）が私を了知させたのです。この語句「ひんそと 脇外に曲らず」は、必然性への単なる表現にすぎないと思えていたのですが、然し突然私には、制限ある事こそが現実の自由・真の自由だ、とわかつたのです。そして全ての自由に関する問題は、これで解けると感じました。

その後、私は数々の公案を容易に透過できました。勿論、他の公案を見性して明らかにすることは必要です。しかし最初の体験、正にそれこそが最も大切なものなのです。他のものは、最初の体験をさらに完全なものとするものであり、さらに人間をより深め明らかにする事を、ただ単に助けるものに過ぎないのです。

（原注）

(1) 金沢は、石川県の西岸中部に位置する県庁所在地。三百年間、前田封建一族の下にあり、鈴木博士の先祖は、代々前田藩の医者であった。

(2) 『碧巖録』は、意訳すると『青い絶壁の記録』で、禪に於いて宗門第一の書といわれている。Dr.R.D.M Shaw訳『The Blue Cliff Record』(Michael Joseph, 1961) を参照。

(3) The Greek Orthodox Church のことを意味する。

(4) 今北洪川（一八一六—一八九二）は、鎌倉・円覚寺の釈宗演の前管長で、その他に埋葬されている。鈴木博士著



邦文『今北洪川』の伝記がある。

(5) 『遠羅天釜』の私の小さな鉄のやかん”は、白隠禪師（一六八五—一七六九）が弟子達に送った手紙を収集した本。

Dr. R.D.M. Shaw 訳の “The Embossed Tea Kettle” (Allen and Unwin, 1963) 参照。

(6) 老師は、禪堂の長で参禅、独参さらに坐禅を監督する。

(7) 東京から鎌倉までは、三十マイルある。

(8) 達磨は、サンスクリット語 Bodhidharma 中国語 Tomo の日本語名、禪宗の初祖で、西暦五二〇年にインドより支那に到来した。

(9) 公案とは、知性では究明できない語句。老師に参する人達に、分別を越えた真実を洞察する手助けのために老師より与えられる。

(10) 夢窓国師『絶句』は、大拙の “Manual of Zen Buddhism” (初版・一八二頁) に書かれている。

(11) ダイコンは、長くて太い白い食用根。日本で人気のある野菜。

(12) 釈宗演は、ソーエン又はソエン、釈の名で “Sermons of a Buddhist Abbot” (Chicago, 1906) の著者として知られている。彼は今北洪川(注(4)参照)の愛弟子で、しかも二十五才で印可をうけている。一八九三年にシカゴの万国宗教会議に出席し、その後渡欧した。

(13) 北条時宗は、一二八二年、北鎌倉の禅寺円覚寺を開基した。鈴木博士はその中の正伝庵に多年住した。

(14) 円覚寺(注(13)参照)の舍利殿は宋王朝時代の寺院様式を残す唯一のものである。とても小規模で簡素だ。一九二三年の大震災で損壊したが、その後、再建された。

(15) 西田幾多郎(一八七〇—一九四五)。偉大な近代の日本の哲学者。青年の時代より親友であった。

(16) 接心。一週間続く、ひたすら坐禅并道する修行の期間。

(17) これは、一八九六年の臘八接心と思える。

(18) 臘八接心。臘は12月の意。ハツ又はハチは八日を意味す。十二月八日は昔しから釈迦成道の日され、人々は十二月一日から八日の明けまで、悟りをひらくためこの接心に全力をつくす。普通、全力を注いでこの期間、寝ることなく修行する。

(19) 見性。人間に本来そなわる根源そのものを撤見すること。最初の悟りに達することともいえよう。

〈訳 注〉

(1) 北条時敬。金沢時代の恩師。西田幾多郎と北条との師弟関係よりやや薄いものがあるが、国泰寺相見の切掛となる人物。

(2) 雪門玄松。管長より突然世俗にもどり、また出家するという独自の歩みが印象的。

(3) 早川亭太郎。次兄でこの頃は執達吏を開業しており、弁護士に七十歳で合格した。

(4) 広田天真。後年、円覚寺・東福寺管長。

(5) 白隠が創始した公案「隻手の音声」

(6) 「龐居士好雪片片」『碧巖録』第四十二則『龐居士語録』（禅の語録7）三十一頁参照。

(7) 「無門関」第一則の「趙州無字」の公案

(8) ポール・ケールラス博士。大拙在米中の恩人。なおエドワード・ヘゲラー氏も加えたアメリカ滞在中の大拙は、研究を要す。

(9) 『碧巖録』第一則「達磨廓然無聖」の圓悟の本則の著語「臂膊不向外曲」

〈参考文献〉

- 秋月龍珉『世界の禅者―鈴木大拙の生涯』岩波書店
- 井上禅定、禅文化研究所編『鈴木大拙未公開書簡』